近代文学注釈大系

近代詩

校訂・注釈・解説　関　良一

有精堂

近代文学注釈大系

近代詩

昭和三十八年九月十日 初版発行
昭和四十四年二月二十日 七版発行

著作者 関良一
発行者 東京都千代田区神田神保町一の三九 山崎清一
印刷者 東京都文京区水道一丁目二の一 鈴木貞三郎
発行所 東京都千代田区神田神保町一丁目三十九番地 有精堂出版株式会社
振替口座東京四〇六八四番

整版 株式会社井村印刷所
印刷 公和印刷株式会社
製本 誠光社製本株式会社

定価 850円

はしがき

一、本書には近代の詩人およそ四十五家の創作詩および訳詩あわせて百七十編を収めた。

二、一般読書人の近代文学の味読、鑑賞に資することはもとより、学者および国語教育家の研究資料として、また大学・短期大学などでの講読、演習のテキスト、高等学校などでの学習の参考として役立つよう、くふうした。

三、所収作品は、長編劇詩『蓬莱曲』以外は、作品の一部の抄出ではなく、すべて完全な形で収録し、能う限り詳密な注釈を加えた。

四、各本文は、原則として初収詩集初版本本文に従い、その収載順に配列し、漢字仮名の書き分け、仮名づかい、句読法、符号の用い方、節の切り方、行の下げ方・改め方などすべて底本に従った。ただし、字体は現行の字体に従い、おどり字は「々」以外は正字に改め、振り仮名は読者の便宜を考慮して現代仮名づかいに改め、適宜加除した。なお、それらの問題点は頭注欄に解説した。

五、底本本文と雑誌などの初出本文およびその他の諸本の本文との相違点は頭注欄に示した。「初出」は初出本文、「原文」は底本とした初収詩集本文の意である。

六、訳詩については、原詩の問題の部分の直訳を頭注欄に掲げ、両者の相違を示すことにつとめた。「原作」は欧文の原詩の意である。

七、各本文の終りに初出誌名、発行年月、初収詩集名、刊行年月を注記した。必要に応じて再掲、再収に関して注記している場合もある。

八、頭注は語句の注釈・鑑賞に重点をおいたが、成立事情、典拠となった、もしくは類似している先行詩文の指摘にもつとめた。ただし、漢文は片仮名交じり書き下し文に改め、欧文は訳文のみを示した。

九、頭注は原則として見開き二ページに通し番号をつけて収めたが、異文・資料などの中には、補注として本文の後に収めている場合もある。考証・注釈などに関する諸家の先行研究は、原則として補注欄に記し、その出所を明らかにすることにつとめた。

十、作家・作品解説では、紙幅の制約のため、まず作家の略年譜を掲げ、各作品について簡単な解説を加えるにとどめた。作品解説では、原則として、作者自身ないし先学諸家の意見を尊重し、資料集的な意味をも多少もたせた。

十一、巻末に主要参考文献、近代詩年表を掲げ、読者の便宜をはかった。文献では、紙幅の関係で講座、雑誌特集号などの細目を省いた。年表では、同月刊の詩集が重なっている場合は、原則として刊行の日付の早いものの方を前に掲げるようにした。昭和二十一年以後の部分は割愛した。

十二、初出雑誌の検索、初出本文および各異文との校合にはかなりの努力を払ったが、何分時間がきびしく制約されていたしごとであるために、中間報告の形に止まっている個所が少なくない。他日の訂補を期するゆえんである。

昭和三十八年七月

関　良一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

新体詩抄（矢田部尙今・井上巽軒ほか）……一
グレー氏墳上感懷の詩……（一）　玉の緒の歌……（八）
新体詩歌（小室屈山ほか）……二
自由の歌……（二）
於母影（森鷗外ほか）……一四
ミニヨンの歌……（一四）　花薔薇……（一五）　オフェリヤの歌……（一六）
マンフレッド一節……（一七）
北村透谷……二〇
蓬萊曲……（二〇）　眠れる蝶……（二七）
島崎藤村……三〇
おえふ……（三〇）　おさよ……（三三）　草枕……（三八）　潮音……（四六）
昼の夢……（四七）　初恋……（四八）　傘のうち……（五〇）　秋風の歌……（五一）
雲のゆくへ……（五五）　晩春の別離……（五五）　小諸なる古城のほとり……
（六二）　千曲川旅情のうた……（六四）　思より思をたどり……（六五）　椰子

の実……(六七)　響りんりん音りんりん……(六八)
土井晩翠……七二
夕の星……(七二)　星落秋風五丈原……(七三)　荒城の月……(九五)
おほいなる手のかげ……(九七)
与謝野鉄幹……九八
僑居偶題……(九八)　人を恋ふる歌……(九九)　敗荷……(一〇四)
与謝野晶子……一〇六
君死にたまふことなかれ……(一〇六)
上田敏……一〇九
象……(一〇九)　落葉……(一一二)　わすれなぐさ……(一一三)　山のあなた……(一一四)　春の朝……(一一四)　鷺の歌……(一一五)　嗟嘆……(一一六)
故国……(一一七)
薄田泣菫……一一八
公孫樹下にたちて……(一一八)　ああ大和にしあらましかば……(一一四)
望郷の歌……(一一六)
蒲原有明……一一九

牡蠣の殻……(一三九)　日のおちぼ……(一三一)　朝なり……(一三三)
智慧の相者は我を見て……(一三六)　茉莉花……(一三七)
河井酔茗……一三九
塔影……(一三九)
伊良子清白……一四二
漂泊……(一四二)　五月野……(一四四)　不開の間……(一四八)　安乗の稚児……(一五二)
横瀬夜雨……一五四
お才……(一五四)
児玉花外……一五七
馬上哀吟……(一五七)
北原白秋……一五九
邪宗門秘曲……(一五九)　謀叛……(一六〇)　金の入日に繻子の黒……(一六二)
糸車……(一六三)　片恋……(一六四)　落葉松……(一六五)
木下杢太郎……一六八
金粉酒……(一六八)　両国……(一六九)　該里酒……(一七〇)　築地の渡し

……(一七三)　玻璃問屋……(一七三)　街頭初夏……(一七五)　むかしの仲間
……(一七六)

三木露風……一七七
去りゆく五月の詩……(一七七)　接吻の後に……(一七九)　ふるさとの……
(一八〇)　沼のほとり……(一八一)　現　身……(一八三)

岩野泡鳴……一八五
闇の盃盤……(一八五)

川路柳虹……一八七
塵　塚……(一八七)

石川啄木……一八九
はてしなき議論の後……(一八九)

永井荷風……一九二
死のよろこび……(一九一)　そぞろあるき……(一九二)　道　行……(一九三)
無　題……(一九四)

高村光太郎……一九六
根付の国……(一九六)　寂　寥……(一九六)　父の顔……(一九九)　冬が来る

……(二〇〇)　冬が来た……(二〇一)　道程……(二〇二)　秋の祈……(二〇四)
雨にうたるるカテドラル……(二〇六)　樹下の二人……(二一一)　氷上戯技……(二一五)　清廉……(二一六)　雷獣……(二一八)　ぼろぼろな駝鳥……(二一九)　レモン哀歌……(二二〇)

三富朽葉……二二二
魂の夜……(二二二)

山村暮鳥……二二四
囈語……(二二四)　だんす……(二二五)　いのり……(二二六)　種子はさへづる……(二二六)　雲……(二二七)

萩原朔太郎……二二八
竹……(二二八)　竹……(二二八)　天上縊死……(二二〇)　蛙の死……(二二〇)
春夜……(二二一)　艶めかしい墓場……(二二二)　再会……(二二四)
小出新道……(二二五)　大渡橋……(二二六)　漂泊者の歌……(二二七)

室生犀星……二四〇
小景異情……(二四〇)　寂しき春……(二四一)　蟬頃……(二四二)　象……(二四三)　靴下……(二四四)　駱駝……(二四五)　春の寺……(二四五)

高麗の花……(二四六)
大手拓次……二四八
藍色の墓……(二四八)
日夏耿之介……二四九
かかるとき我生く……(二四九)　快活なVILLA……(二四九)　道士月夜の旅……(二五〇)　青面美童……(二五四)
福士幸次郎……二五八
自分は太陽の子である……(二五八)
千家元麿……二六〇
秘密……(二六〇)　落葉……(二六一)
西条八十……二六二
柚の実……(二六二)　海にて……(二六二)　頽唐……(二六三)
佐藤春夫……二六五
水辺月夜の歌……(二六五)　秋刀魚の歌……(二六五)　春のをとめ……(二六八)
水彩風景……(二六九)　乳房をうたひて……(二七〇)　恋愛天文学……(二七一)
望郷五月歌……(二七二)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

堀口大学……二七五
獅子宮……(二七五)　踊る女……(二七六)　詩法……(二七六)　失はれた美酒……(二七七)　昆虫あみ……(二七八)　シャボン玉……(二七九)　耳……(二七九)
砂の枕……(二八〇)　毛虫……(二八〇)　蟬……(二八一)
宮沢賢治……二八二
春と修羅……(二八二)　永訣の朝……(二八五)
中野重治……二八九
歌……(二八九)　帝国ホテル……(二九〇)
金子光晴……二九二
燈台……(二九二)　風景……(二九六)
三好達治……二九八
甃のうへ……(二九八)　春……(二九九)　Enfance finie……(二九九)
郷愁……(三〇〇)
丸山薫……三〇一
砲塁……(三〇一)　噴水……(三〇一)　水の精神……(三〇二)
西脇順三郎……三〇四

天気……(三〇四)　雨……(三〇四)　皿……(三〇五)
草野心平……三〇六
ぐりまの死……(三〇六)　作品第肆……(三〇七)
北川冬彦……三〇八
戦争……(三〇八)　馬……(三〇八)
立原道造……三〇九
はじめてのものに……(三〇九)　のちのおもひに……(三一〇)
中原中也……三一二
一つのメルヘン……(三一二)　正午……(三一三)
補注……三一五
作家・作品解説……三二四
主要参考文献……三六八
近代詩年表……三七八

グレー氏墳上感懐の詩

矢田部尚今訳

山々かすみいりあひの
徐に歩み帰り行く
やうやく去りて余ひとり

四方を望めば夕暮の
唯この時に聞ゆるは
遠き牧場のねやにつく

猶其外に常春藤しげき
近よる人をすかし見て
訴へんとや月に鳴く

かしこには楡又ここに
其下かげにうづだかく

鐘はなりつつ野の牛は
耕へす人もうちつかれ
たそがれ時に残りけり

景色はいとど物寂し
飛び来る虫の羽の音
羊の鈴の鳴る響

塔にやどれるふくろふの
我巣に寇をなすものと
いとあはれにも声すなり

あらぎの木ぞ生茂る
苔むす土の覆ひたる

一グレー氏―トマス＝グレー Thomas Gray 1716～1771。イギリスの詩人・学者。ロンドンに生まれ、ケンブリッジ大学に学んだ。同大学教授。擬古典主義時代に浪漫的傾向を示した。

二墳上感懐の詩―「墓畔の悲歌」Elegy Written in a Country Churchyard 一七四二年ごろ起稿、一七五一年刊。グレーの代表作。「墳上」は墳墓のほとりの意。「上」はほとり。原題は「田舎の寺院の墓地で記した哀歌」の意。全三十三節。ただしのち第三十節「駒鳥の連」が省かれた。訳詩でもその節は省かれている。原文では振り仮名は左傍に施されている。

三矢田部尚今訳―原文では、この詩のところには訳者の署名がなく、その直前に「我邦ニ於テハ西洋ノ詩歌ヲ翻訳スル人甚ダ少ナシ(下略)尚今居士識(しるす)」という前書がある。目次には「グレー氏墳上感懐の詩(尚今居士)」。

四山々かすみ―原作にはない句。

五いりあひの鐘―日暮に寺で撞(つ)く鐘の音。晩鐘。暮鐘。ここでは教会の鐘の音。「いりあひ」は入相。日の暮れること。暮方。「いりあひ」だけで「いりあひの鐘」を意味する時もある。

六耕へす―「耕やす」の古語。

七たそがれ時―夕方の薄暗くなった時刻。「たそがれ」は「誰(た)そ彼(かれ)」で、薄暗く、人のさまの見分け難い意。

八虫―原作では「かぶと虫」。

九ねや―寝屋(ねや)。寝所。ここでは羊小屋。

一〇羊の鈴の鳴る響―「羊の鈴」は羊の首につけてある鈴。原作では「眠気を誘う鈴の音が遠くの羊の群れを眠らせ」。

一一常春藤しげき―蔦が繁って覆っている。

一二寇をなす―害を加える。

一三楡―にれ科の落葉高木の総称。

一四あらぎ―いちい。一位(いちい)科の常緑高木。

一五うづだかく―原文のまま。

一六苔むす―苔が生えている。

一 壙—墓穴。
二 埋まれ—埋められ。他動詞「うづむ」は下二段活用だから、受身の助動「る」は接続しない。ここは「うずもれ」「うめられ」などとあるべきところ。
三 この村の古人—原作では「この村里の素朴な祖先たち」。
四 のきの燕もにはとりも—原作では「藁屋根の小屋に来る燕の囀り、鶏の鋭い叫び」。
五 木魂—やまびこ。
六 角笛—つので作ったふえ。
七 あさぼらけにぞなりぬれば—原作では「いぶきかおる朝のそよ風のおとづれも」。「あさぼらけ」は朝おぼろに明けてくるころ。あけぼの。
八 かまびすしく—かしましく。やかましく。
九 冥土—死者の世界。
一〇 死にたる人のはかなさよ—原作にない句。
一一 よなべ—夜業。原作では「夕方のしたく」。
一二 爺—父。
一三 小膝—「小」は接頭語。
一四 麦も小麦も—原作では「収穫」。
一五 山もはたけも其くはに—原作では「彼らの畝は幾度も頑固な土を征服した」。「くは」は鍬。
一六 手荒き馬—原作では team すなわち一組の牛や馬。連畜(れんちく)。
一七 其斧—原作では「力強い一撃」。
一八 君が儘なりき—あなたの思う通りになったのであった。「君」は死者。原作では「彼ら」。
一九 功名とても浮雲の　過るが如きものなれば—てがらや名誉も空に浮かぶ雲が行き過ぎるようにはかないものだから。「論語」述而(じゅつじ)篇に「不義ニシテ富ミ且ツ貴キハ我ニ於テハ浮雲ノ如シ」とある。この一節は原作では『大望』をして彼らの有益な栄苦を、彼らの淳朴な歓喜と不遇な運命を翻弄させるな。また『栄華』をして侮りの笑みを浮かべて貧しい者の短い単純な履歴を聞かせるな。
二〇 あらずかし—「かし」は強意の終助詞。ここでは律調を整えるためにも用いている。

壙(あな)に埋(うず)まれこの村の
のきの燕(つばめ)もにはとりも
あさぼらけにぞなりぬれば
冥土(よみじ)の人の眠(ねむり)をば
死にたる人のはかなさよ
妻のよなべも誰(たれ)が為(ため)めぞ
爺(てて)の帰りをよろこびて
曾(かつ)てこの世に居(い)し時は
山もはたけも其くはに
繁れる森も其斧(その)に
功名とても浮雲(うきぐも)の
この古人の世の益と
わびしき妻子(つまこ)の暮しをも
古人(ふるびと)長く打(うち)眠る
木魂(こだま)に響く角笛(つのぶえ)も
かまびすしくはありつれど
覚(さま)すことこそなかりけれ
身を暖むる爐火(いろりび)も
愛(めず)るわらべがかたことに
小膝(こひざ)にすがることもなし
麦も小麦も其鎌(そのかま)に
手荒き馬も其むちに
まかせて君が儘(まま)なりき
過(すぐ)るが如(ごと)きものなれば
ほねをりするも不運をも
笑ふべきにはあらずかし

二 門閥―家がら。門地。ここでは家がらの高く貴いこと。
三 みめうつくしきをとめご―顔だちの美しい少女。「をとめご」は原文では「をとめこ」。原作では「美の恩恵」。
三 浮世―定めない世の中。
四 栄利―原文の振り仮名は「えのり」。
五 無常の風ふかば―死がやって来たら。「無常の風」は死のたとえ。「無常」は変化して定まらないこと。はかないこと。原作では「避けがたい『時』が待っている」。
六 草葉の露もおろかなり―はかないもののたとえに引かれる草の葉に置いた露よりももろくはかない。「もおろか」は「何々は言うもおろか」の略。「おろか」はものの数でもない意。
七 黄泉に入るのほかぞなき―「黄泉」は死者の世界。「なき」は「ぞ」の係り結び。「草葉の」以下は原作では「栄華の道はみな墓場に行く道にすぎない」。
八 寺―寺院。ここでは教会。
九 あたりまばゆき屋の内に―原作では「長くつらなる側廊と格子張りの円天井に」。「まばゆき」はまぶしい。
一〇 頌歌―死者を讃える歌。
一一 な思ひそよ―思うなよ。「な……そ」は禁止の意の語。「な」は副詞。「そ」は禁止の終助詞。
一二 ひつぎ―柩(ひつぎ)。棺(かん)。原作では「伝記を記した骨壺」。
一三 玉の緒を つなぎとむべき術―生き返らせる方法。「玉の緒」はいのちの意の古語。「魂(たま)の緒」の意。「つなぎとむ」は「緒」の縁語的表現。
一四 へつらふ人のほめ言―ここでは死者にこび媚の式辞などをさしている。この一行は原作では「へつらい」が死の鈍い冷たい耳をなだめ得ようか」。
一五 量―器量。度量。
一六 具し―身にそなえ。
一七 性―性質。

富貴門閥のみならず
浮世の栄利多けれど
草葉の露もおろかなり

苔にうもれし古人は
あたりまばゆき屋の内に
楽器の音を聞ずとも

ひつぎ肖像美を尽し
ひとたび絶えし玉の緒を
へつらふ人のほめ言も

考へみれば廃れたる
世にすぐれたる量ありて
詩文の才も多けれど

学びの海は広けれど
心の性は賢きも

一八 みめうつくしきをとめごも
一九 いつか無常の風ふかば
二〇 黄泉に入るの外ぞなき

墓場の上に寺をたて
二一 頌歌の声に合すなる
二二 身の不徳とな思ひそよ

人の尊敬多くとも
つなぎとむべき術はなし
長き眠は覚すまじ

此の古墳の古人も
二三 国を治むる徳を具し
二四 あらはれずして失ける歟

わたる船路を知らざれば
身は賤しくて貧なれば

一 世のほまれ—世間の賞讃。
二 空しく—いたずらに。むだに。
三 鄙に終りけり—片田舎に生涯を終ってしまった。「鄙」は田舎。この一行は原作では「冷酷な貧窮は彼らの気高い情熱を抑え、そして魂の暖流を凍結させてしまった」。
四 水底—原作では「暗い底知れぬ海底の洞窟」。
五 輝く珠—ここでは真珠。世に知られないもののたとえ。
六 高き峰—原作では「荒れ野」。
七 かをる木草—香いのよい木や草。ここでは右に同じたとえ。「木草」は原作では「花の芳香」。
八 千代の八千代の昔し—大昔。「昔し」は原文のまま。『古今集』巻七の賀歌「我が君は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて苔のむすまで」(詠み人知らず)があり、この句は和漢朗詠集の本文にもとづき、明治二十六年国歌に制定された。
九 知られで—知られないで。
一〇 業はおとるもハムデンに—「ハムデン」はハンプデン John Hampden 1594〜1643。クロムエルの従兄弟。チャールズ一世の悪政に反抗した。原作では「村に埋れたハンプデン、彼は不屈の勇気で彼の畑地の小暴君に対抗した」。
一一 ミルトン—ジョン＝ミルトン John Milton 1608〜1674。イギリスの詩人。クロムウエルの共和政府にも関与した。『失楽園』『復楽園』などがある。
一二 クロムエル—オリヴァー＝クロムウエル Oliver Cromwell 1626〜1713。イギリスの軍人・政治家。清教徒革命に当たり議会をひきいて王党軍を破り、一六四九年チャールズ一世を処刑して共和制を布き、五三年護国卿となって独裁権を揮い、つづいてオランダ海軍を破り、イギリスの海上制覇のいとぐちを開いた。
一三 議士—議員。代議士。
一四 服さしめ—服従させ。
一五 外に見る—度外視する。問題にしない。
一六 安危—安全と危険。

世のほまれをば聞かずして
深き水底求むれば
高き峰をば尋ぬれば
千代の八千代の昔しより
実に此墓に埋もれて
詩は拙くもミルトンに
クロムエルにも比ぶべき
議院の議士を服さしめ
国の安危を身に委ね
此等のわざはおしなべて
恵みはひろく及ばねど
不徳もいとど少なしや
民をなやめて利をあみす

空しく鄙に終りけり
輝く珠も有るぞかし
かをる木草の多けれど
人に知られで過ぎにけり
業はおとるもハムデンに
国に軍を挙げずとも
人のかばねやあるならん
人のおどしも外に見る
高き誉望を民に得る
古人何ぞあづからん
又常々のふるまひに
人を殺して王となり
夢にもみまじさることは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com